スタートカリキュラムの実施とその効果の検証

和田　信行

1　はじめに

就学前の教育・保育と小学校１年生入学当初の教育の段差が問題になって久しい。小一プロブレムというショッキングな出来事も、未だに解消をしているわけではない。東京都教育委員会の2010年度の調査でも都内の18.9％の小学校で問題行動が発生しているというデータがある。[1)]

小一プロブレム問題が注目されているが、保幼小の接続の意義を、子どもの成長や学びの連続性の視点から捉えることも重要なのである。つまり、幼稚園や保育所の５歳児後半のアプローチカリキュラムと小学校１年生入学後のスタートカリキュラムをどのように繋げ、実施していくかが重要なのである。

スタートカリキュラム研究・実施については、先進的な研究校から始まり、現在は、各地の教育委員会も、その取り組みを先導している。しかし、スタートカリキュラムについての認識は十分とは言えない。段差はあって当たり前とか、段差は乗り越えるものといった乱暴な言い方で無視をしてしまうケースもある。

アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムについて幼児教育関係者や小学校教育関係者が正確にその必要性や意義を認識し、多くの幼稚園や保育所、小学校でカリキュラム上も、子どもの成長や学びにおいても、滑らかに接続されることが重要なのである。

そのために、本研究では、スタートカリキュラムに焦点をあて、「スタートカリキュラムの実施とその効果の検証について」として研究を進めていくことにした。

本研究・調査の対象校園は、都内公立Ａ小学校・同Ｂ幼稚園・同Ｃ保育園である。この３校園は、2009年度～2011年度の３年間「東京都教育委員会就学前プログラム及び就学前カリキュラム実証研究校[2)]」として研究を進めてきた。幸い、初年度の立ち上げから３年間かかわってきた。

この時の実践指導結果を基に、以下の研究を行った。一点目は、スタートカリキュラムの考え方や実践の方法を明らかにしていくことである。二点目は、スタートカリキュラムの効果についての客観的な検証である。

スタートカリキュラムの実践事例については様ざまな研究が行われているが、その客観的な検証事例は見あたらない。以下その研究を論述する。

2　スタートカリキュラムの考え方

（１）生活科の役割

平成元年に生活科が誕生した。長い間、就学前の教育や保育と小学校低学年の接続の問題が議論されてきたが、その段差を埋める生活科が誕生したのである。低学年の新教科、生活科が誕生した当初、生活科の授業の開発に大変な努力をした。小学校の教員は、幼稚園に指導内容や、その指導法を学びに出かけた。

「遊びを中心にした総合活動」と「教科書による教科学習」の違い、「教師主導で注入式の小学校教育」と「子どもの思いや願いを生かす幼児教育」との違いに唖然としたものである。

元来、生活科は、幼児教育と小学校教育の滑らかな接続のために誕生した教科なのである。だから、小一プロブレムと問題が叫ばれている今こそ、生活科の原点に帰って、幼小の連携や滑らかな接続に力を発揮していくべきではないだろうか。

しかし、生活科１教科だけで、今日的な小学校１年生の問題に対応していくことには無理がある。生活科を中心としたスタートカリキュラムが必要になってくるのである。[3)]

（２）スタートカリキュラムとは

スタートカリキュラムとは、「小学校の学習や生活に滑らかに接続できるよう工夫された１年生入学当初の指導計画」のことである。期間は、入学式後１～２週間、４月～５月の連休明けまで、１学期間と幅がある。また、内容的にも、学校生活への適応型、生活科を核にしたモジュール型、教科解体の総合型と様々な方法が行われている。

先にも述べたとおり、保幼小の接続の中心的役割を担うのは生活科である。今こそ、生活科が打って出る番である。

入学式直後から教科書による教科学習、45分で５分の休み時間では、保育園や幼稚園から入学してきた児童にとっては段差が大きい。勿論段差を乗り越えられる子もいるし、段差が必要だと主張する者もいる。小学校に入学したら国語や算数の勉強をしたいという子がいることも事実である。

ここで紹介するスタートカリキュラムは、新宿区立四谷第三小学校での実践（平成17・18年度区研究発表校）がベースになっている。[4)] その実践の特色は、次の２点である。

（ア）遊びを取り入れた楽しい活動

様々な幼稚園や保育園から入学した児童に、人とのかかわりをもたせるには、楽しく、自信をもって取り組める活動が必要である。それぞれの幼稚園や保育園での経験を引き継いだ活動を入学当初には取り入れたい。

体育、音楽、図画工作、国語、特活、道徳、生活科等々の時間を15分や30分に分割（モジュール）して、毎日行えるように工夫する。

鬼ごっこや、ハンカチ落とし、絵描き歌や手遊び、じゃんけん列車、粘土遊び等を工夫し、楽しい活動を行っていく。そのためには、教師も、子どもたちの就学前の活動の研究が始まる。保幼小の接続には実際に小学校の教師が幼稚園や保育所に足を運んで学ぶのが一番である。また、幼稚園や保育所の先生方も小学校の教育を見て、保幼小の学びの連続性をつかんでいくのである。

１年生の生活のスタートは入学式からではない。幼稚園や保育園での生活から小学校生活への繋がりの橋渡しをすることが生活科の使命でもある。

（イ）生活科を核にした合科的な活動

45分単位の授業をしていれば、生活科の授業は週に３回である。当然、国語や算数、音楽や体育も45分の授業となる。小学校１年生、入学当初の児童に、教科書を使って45分単位の授業を進めることは奨励できない。従来から、１年生の指導が上手な先生は、入学当初の児童の実態に合わせた時程を自然と工夫をしてきていた。まさに、スタートカリキュラムを実践していたのである。

この、生活科を核にした合科的な活動の方法は、45分の教科学習のスタイルを子どもの側

資料1　スタートカリキュラム（部分）

6. A小学校　1年生　スタートカリキュラム

1週目　4月5日～4月9日

○ 聞き心地の良い話を作ろう。（対話、傾聴者）
○ 笑顔で挨拶し、進んであいさつしよう。
○ ゲーム、歌、読み聞かせで楽しく過ごそう。
○ 担任が連絡帳を書く時間（登校、帰宅後等）

	5日（月）	6日（火）	7日（水）	8日（木）	9日（金）
朝			学級びらき ドキッペ入れ中かな	給食開 ～読み聞かせ～	じゃんけん ～ゲーム～
1時間目			学活 あいさつ あく（しゃ）で おはよう 学活 身の回り ロッカーの使い方 学活 持ち方、名前書きの仕方	学活 あいさつ あいさつの歌 学活 身の回り 道具箱の使い方、道具のしまい方 学活 計画の事前指導	学活 あいさつ 自分であいさつ 国語 名前を教えよう 国語 自己紹介をしよう。
2時間目			生活 学校探検 トイレ、下駅等 生活 学校探検 保健室 行事 活動教室説明	生活 学校探検 保健室 行事 運動会練習のお話 身体計測	体育 整頓元気しまいの 体育 ねらびっこ 生活 学校探検 校庭
3時間目		行事 入学式 写真撮影	国語 一年生の国語 学活 椅子の正面 学活 椅子の座り方 廊下歩きに慣れる（のり） 学活 下駅の仕方 並び方	国語 クレパスで名前を書く 学活 椅子の正面 学活 椅子のしまい方 学活 下駅の仕方 並び方	学活 体育館のたたみ方 学活 通学の帰りの指導 学活 下駅の仕方 並び方
4時間目		学活 指導説明 学校、学級、クラス名 保護者の方への説明			

2週目　4月12日～4月16日

	12日（月）	13日（火）	14日（水）	15日（木）	16日（金）
朝	同窓式に参加	給食開 ～読み聞かせ～	学級びらき ドキッペ当番さん	給食開 ～読み聞かせ～	同窓集会に参加
1時間目	生活 学校探検 校庭②	生活 学校探検 ランチルーム	生活 学校探検 屋上	生活 学校探検 音楽室	算数 もうじゅうがりゲーム
	生活 春、見つけ 校庭の花で遊ぼう。	行事 歯科検診	生活 楽しい学校 学校にひを灯そう	音楽 楽しく歌おう 「さんぽ」 「桜歌」	算数 仲間作りゲーム
	図工 花を貼ろう。絵こう		図工 クレヨンで○を書こう		算数 出てきた数字
2時間目	国語 教室の持ち方	行事 心臓検診	算数 教科書を見てみよう	学活 おかしもの約束	国語 ひらがな「く」
	国語 名前を教室で書く。		算数 足が出るつくろう	学活 給食当番のかぞりの方	国語 「うれしいひ」②
	国語 名前の名刺を作ろう	音楽 楽しく歌おう「さんぽ」	算数 仲間作りゲーム	行事 ひなんくんれん	音楽 楽しく歌おう「さんぽ」
3時間目	図工 名刺に絵を書こう	国語 ひらがなの練習帳	国語 ひらがな「つ」	国語 ひらがな「へ」	生活 2年生「はじめまして」
	図工 絵に色を塗ろう。	国語 ひらがなを書く「し」	国語 教科書を見てみよう	国語 「うれしいひ」②	生活 交流ゲーム
	生活 楽しい学校名刺の交換をしよう	算数 仲間作りゲーム	国語 「うれしいひ」①	国語 くまの絵本読み聞かせ	生活 グループで自己紹介
4時間目	学活 給食について（栄養士）	学活 当番の仕事 日直の仕方	学活 持ち方 色鉛のたたみ方	図工 夢の星の絵をしよう	生活 名のなかカードの書き方
	学活 給食の食べ方	学活 配膳の仕方	学活 食器の置き方	学活 当番の仕方	生活 カードに書こう
	学活 食器の配膳 片付け方	学活 片付けの練習	学活 牛乳パックのたたみ方	学活 食器の置き方 片付け	学活 食事のマナー
5時間目		生活 学校探検 図書室 国語 読み聞かせ			行事 交通安全教室 通学路のお話方
		国語 絵本を読もう			

に立って見直したカリキュラムと言える。15分、30分お45分というモジュールにより合科的な方法を組み立てて行くのである。

生活科15分と国語30分、生活科15分と図工30分などと組み合わせることにより、毎日生活

科を核にした活動を生み出すことが可能となる。

このような考え方でＡ小学校のスタートカリキュラムは作成されている。上記にそのスタートカリキュラム（2010年度版）の１週目と２週目を資料として示す。

3　スタートカリキュラムの調査・記録

2010年４月、Ａ小学校の１年生のスタートカリキュラムの実践が行われた。研究の１年目にスタートカリキュラムの構想を練り、研究２年目の４月に実践を行った。

スタートカリキュラムの実践は、４月の入学式直後ということで、新学期が始まってからの準備では間に合わない。前年度のうちにスタートカリキュラムを作成しておく必要があった。

Ａ小学校のスタートカリキュラム成果検証の調査概要は、以下の通りである。

資料２　調査の概要

１　調査目的

小一プロブレムの解消や保幼小の滑らかな接続について、スタートカリキュラムの工夫が各地で実践されている。その効果については、印象的には支持されているようであるが、効果の客観的な分析は行われていない。それは、スタートカリキュラムを実施した場合と、実施しない場合とを比較研究することや、客観的なデータにより分析することが困難な事にある。

本調査では、複数の学級をそれぞれの担任の観点別記録を、客観的な数値に置き換えることにより、スタートカリキュラムの効果を分析しようと試みた。

２　調査方法

（１）調査日時

第１回目　2010年４月９日(金)　第２回目　2010年５月７日(金)

（２）調査小学校

Ａ小学校

１年１組23名、１年２組22名　合計45名

（３）記録用紙

〔観点・三つの力について〕

①生活する力

学校生活に必要な基本的な生活習慣はどうか

②かかわる力

友達や先生とかかわることはできるか

③学ぶ力

学習への意欲や態度はどうか

記　録　用　紙

		観点別記録	観察記録
組 番 名前	生活する力	あいさつ　A B C D 片付け　A B C D 手洗い　A B C D チャイム着席　A B C D	
	かかわる力	隣のこと話す　A B C D 多数の友達と話す　A B C D 先生と話す　A B C D チャイム着席　A B C D	
	学ぶ力	学習の用意ができる　A B C D 鉛筆が正しく持てる　A B C D 字をかける　A B C D 話を集中して聞ける　A B C D	

ABCDを８点、６点、３点、１点に点数化して集計する。但し、網掛けの項目に就いては、９点、７点、３点、１点に重み付けをする。その結果、満点の場合は、生活する力34点、かかわる力33点、学ぶ力33点、合計100点となる。

資料３　就学前に育てる三つの力

	幼稚園や保育所で
生活する力	①片付け・整理整頓 ②着替え ③食事 ④トイレ・手洗い ⑤安全（きまりを守る） ⑥生活リズム（午睡は？）
かかわる力	①だれとでも仲良く遊べること ②きまりを守って遊べること ③自分から話が出来ること ④先生の指示を素直に聞ける子 ⑤暴力をふるわないで解決できること
学ぶ力	①遊びを通して学ぶ力を育てること ・心情、意欲、態度 ・好奇心、探究心 ・思考力の芽生え ②集団生活で自発性や主体性を育てること（協同的な学びを通して） ・協同性の育ち ・人とのかかわり ・言葉と体験（コミュニケーション力）

三つの力については、アプローチカリキュラムの作成においても観点にしていた。観点の具体的な視点は違うが、幼稚園や保育所でもこの三つの力を育てていくことが就学前に必要と考えている。

調査対象のＢ幼稚園ではアプローチカリキュムで育った新入生は10名程度である。

保幼小の連続した接続カリキュラムが望まれるところであるが、すべての園児がアプローチカリキュラムを経験してきているわけではない。公私幼保の全ての園で、アプローチカリキュラムが実施できることが望ましい。

４　記録データの分析

（１）三つの力の変化

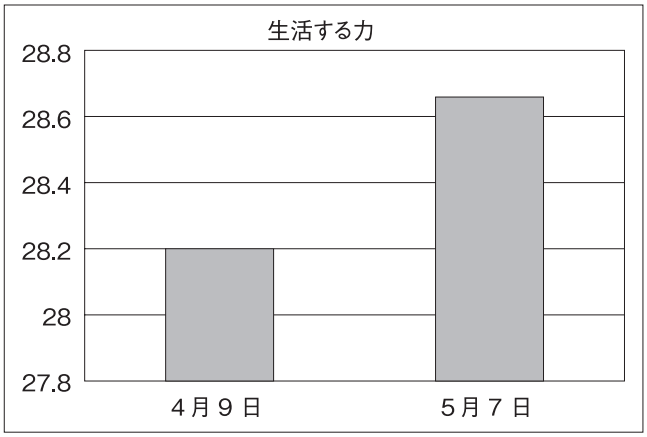
１組と２組の担任に、第１回目の記録を４月９日に取ってもらった。入学式の２日後の状況を三つの観点で記録

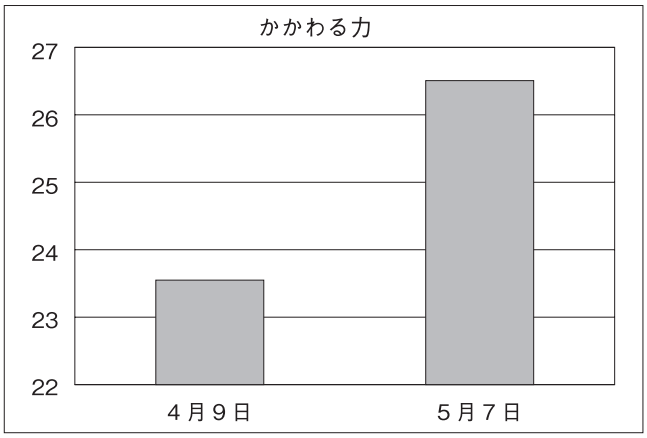
をしてもらった。

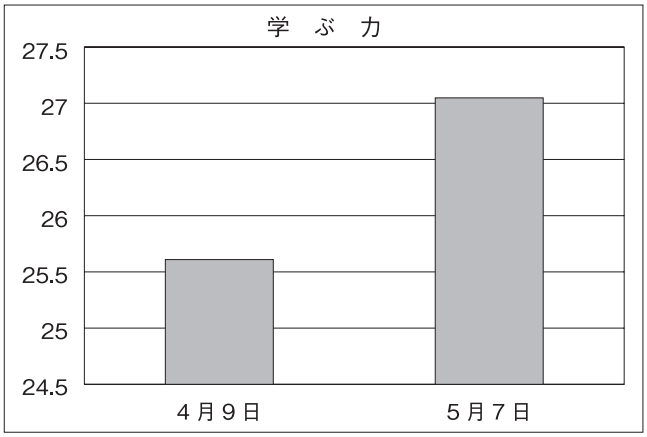
そして、約１ヶ月後の５月７日に同じように記録を取ってもらった。この２回の調査結果を資料４に、元データを資料５に示す。

本調査には、担任の記録以外に、本学のゼミ学生20名が、この２学級に、４月16日、23日、30日に２時間ずつ観察記録に入った。短大の２年生の４月で十分な記録は取れないが、調査データを補完できるよう観察記録をした。

資料４　三つの力の変化グラフ







（２）記録データの読み取り（観察記録も含めて）

①学級間の数値の違いをどう捉えるか

１組は中堅男性教諭、２組は新卒２年目の女性教諭の組み合わせであるが、事前の準備や指導案の検討も一体となって行っていた。２組の教諭は、昨年に引き続き１年生の担任である。

数値で客観化しようと試みたが、１組と２組のデータには差が見られる。ABCD の評価基準に差があるのか、学級の子どもに違いがあるのか、数値と観察記録を合わせて分析をしていく必要があった。

１組の学級の雰囲気は、４月９日の時点では、かなりざわざわとした感じがあった。

一方、２組の学級の雰囲気は、優しい雰囲気の中での教師とのやりとりのせいか、穏やかな学級のスタートであった。１組と２組の４月９日と５月７日の変化を見てみると、１組の数値は全て良くなっているが、２組の数値は、生活する力とかかわる力はやや低下、学ぶ力はやや上昇している。

２組の児童は、スタート時か

資料５　調査元データ（番号順はランダム）

組	番号	生活する力			かかわる力			学ぶ力	
		４月９日	５月７日		４月９日	５月７日		４月９日	５月７日
１組	1	32	32		25	31		31	33
	2	28	27		25	33		21	31
	3	28	26		25	33		25	25
	4	19	20		16	20		27	29
	5	32	32		27	31		25	33
	6	28	34		25	18		19	27
	7	20	25		19	27		15	21
	8	23	26		16	21		10	12
	9	28	25		21	33		21	27
	10	26	28		15	25		18	25
	11	28	30		25	29		21	21
	12	23	23		21	25		19	12
	13	18	26		27	29		22	21
	14	34	34		27	33		33	34
	15	23	28		22	33		19	21
	16	26	28		12	29		19	25
	17	28	30		27	33		25	27
	18	26	26		25	27		22	25
	19	32	32		16	25		33	33
	20	26	34		25	27		15	15
	21	20	26		25	29		25	25
	22	15	30		8	16		25	25
	23	12	17		18	27		18	16
１組平均		25	27.78261		21.3913	27.56522		22.08696	24.47826
２組	24	33	32		27	25		27	33
	25	34	28		29	31		29	32
	26	28	25		19	25		22	25
	27	34	32		27	25		33	33
	28	34	32		27	27		33	31
	29	34	34		29	29		33	33
	30	32	28		29	29		31	32
	31	32	32		29	27		33	33
	32	32	30		29	25		31	33
	33	34	32		27	25		33	31
	34	34	30		25	26		29	32
	35	34	34		29	25		33	33
	36	34	32		25	25		31	33
	37	25	28		27	27		22	22
	38	23	23		18	25		25	22
	39	34	34		27	19		33	33
	40	34	28		25	27		33	31
	41	30	32		15	15		25	31
	42	30	30		25	25		31	31
	43	32	30		27	27		33	31
	44	32	23		27	25		22	18
	45	28	23		29	25		25	25
２組平均		31.68182	29.63636		25.95455	25.40909		29.40909	29.90909
全体平均		28.19565	28.66919		23.57372	26.53403		25.58885	27.07561

ら良い数値である。

これに比べて、１組の児童の中には、生活する力も、かかわる力も、学ぶ力も４月９日の時点でかなり課題の多い様子が数値上からも明らかである。

１組と２組を合わせて平均化した数値と個別の学級ごとの数値と個々の児童の数値に着目して検証をすることが必要である。

１組と２組を合わせて平均化した数値と個別の学級ごとの数値と個々の児童の数値に着目して検証をすることが必要である。

②生活する力の変化をどう捉えるか

生活する力についての変化は、他の観点と違って変化の幅が少ない。グラフの目盛りから

も明らかなように、28.19→28.66へとの微増である。
数値的には、入学当初からかなり生活する力が備わっていると見ることができる。
　しかし、これは、平均として見た場合であり、個別に見ていくとかなり、指導を要する児童がいる。
№22（15→30）「用意に時間がかかる。着替えに時間がかかる。」→「挨拶ができるようになってきた。」
№23（12→17）「とてもゆっくりマイペース。フラフラと立ち歩くことが多い。」→「なかなかのマイペース。どうしても座るのが遅くなる。」
　このような児童に対して、スタートカリキュラムでは無理に一斉指導をすることなくゆったりとした活動を中心にした指導の中で生活する力を育てている。数値は低いが、着実に変化をしていることは確かであった。
③かかわる力の変化をどう捉えるか
　友達や先生とのかかわりについての変化23.57→26.53とかなり高まっている。１ヶ月間で学級内の人間関係の変化がかなり見える。
　気になる児童は、№22（８→16）「話しかけてもなかなか返事をしない。恥ずかしがり屋。ありがとうは言える。」（学生の観察メモ４／16）→「遊べるようになってきた。」（学生の観察メモ４／23）
№５（16→20）「ずっと話していて、人と上手にかかわることができない。いわれるとムッとなり、部屋を出ることがある。」→「人にちょっかいを出す傾向は変わっていない。女の子といたくなるらしい。」
№23（18→27）「あまり人と話せないがかかわることは嫌いではない。」→「隣の子と話さない。先生が声をかけると応答する。」（学生の観察メモ４／16）「字の練習が終わった後、先生に声をかけず、ノートを出してアピールする。前回は隣の子と話をしているところを見かけなかったが、字を書き終わった後、自分から話しかける。」（学生の観察メモ４／23）「前回よりも発言する回数が多く、お友達にも話しかけている。」（学生の観察メモ４／30）
担任の記録でも人とのかかわりがＣからＡとなっていてかかわりの変容が見とれる。
④学ぶ力の変化をどう捉えるか
№８（10→12）「気持ちの切り替えができない。字を書くことは苦手。塗り絵はできる。」→「集中することが難しい。」
　２組の学ぶ力はほとんどの児童がオールＡに近い評価を得ているが気になる児童も数名いる。
№44（22→18）「字が雑になってしまうことがある。」→「字が雑。椅子に座って長時間集中して話を聞くことができない。」
　学生の記録を見てみると、「鉛筆をかじるくせがある。」（４／16）「色鉛筆の作業で遊び始める。授業中他のページを見てしまう。」（４／23）「折り紙を準備したとたん遊び始める。道具箱の道具で遊び始める。先生の説明を聞く前にのりで遊び始める。」（４／30）　この記録からも、自分の興味や関心で自由に行動をしようとする児童であることが分かる。

5　効果の検証

　スタートカリキュラムの有効性の検証に客観性を持たせることは難しいことである。しか

し、スタートカリキュラムの有効性を論じるためには必要なことと考える。

今回、Ａ小学校、Ｂ幼稚園、Ｃ保育所の接続カリキュラム研究に当初からかかわることができたので、アプローチカリキュラムスやタートカリキュラムの開発とその効果の検証を試みた。

（１）スタートカリキュラムの検証

①数値化しての客観性

今回は、Ａ小学校に、４月の第１週から第５週目まで、毎週金曜日に１年１組と２組の児童の状況を記録法と観察法により調査研究を行った。１週目と５週目は担任による記録、２～４週は学生の観察記録を中心に行った。そして、第１週と第５週の記録を数値化して見た。（記録用紙・データの分析を参照）

数値化することの課題もある。「何を観点とするか」「観点の評価基準をどうするか」「記録をとる時間はあるのか」「数値で何が分かるのか」等々の問題もある。

今回は、敢えて数値化し、入学当初の状況と１ヶ月後の変化を比べることを試みた。数値化することにより、担任が、学級内の児童の記録を取りやすくなったことは確かである。そして、数値の低い子の存在に気付くことに繋がった。

そして、１ヶ月後に同様の記録を取ることによって、児童の変容や指導法の改善につながるという効果が現れてきた。

全体的な数値を見ていくと、スタートカリキュラムの効果を検証することが可能であると言える。また、数値化することに伴い、カリキュラムの評価や指導法の評価・改善に繋がっていくことも明らかになった。

②三つの力の観点

アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムについて「三つの力」をキーワードにして開発することを提案したい。

就学前と入学後の子どもの成長や学びの連続性を考えるとき、「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の３点をカリキュラム作りの基本に据えて考えていくのである。

今回の調査記録用紙の観点は、この考えから作成をした。この三つの力の具体的な視点については、まだ課題があると思われるし、検討の余地はあると考えるが、数値化していくということでは、その効果はあったのではないだろうか。

（２）スタートカリキュラムの有効性について

①生活科を中心としたスタートカリキュラムの意義

今回、スタートカリキュラムの検証法を中心にして論述してきたが、検証をしていく過程で、Ａ小学校のスタートカリキュラムの有効性も明らかになってきた。

Ａ小学校のスタートカリキュラムの特色は、生活科を中心にしてのカリキュラム作りである。

入学直後の児童に、45分単位の教科書を中心にした指導は馴染まない。入学直後の活動に、幼児期の遊びを中心にした総合活動との接続を意識した計画をしている。

生活科を核にして、他教科等との合科的・関連的な指導を取り入れている。生活科＋国語、生活科＋図工等の組み合わせを通して、児童が小学校の教育に慣れていくためのカリキュラムとなっている。

このことが、児童一人一人の状況に応じて指導をしていく上で有効であった。

②スタートカリキュラムと教師・学校の変容

スタートカリキュラムは、４月になってから準備をしていたのでは間に合わない。誰が担任をしてもできるように、学校としてのスタートカリキュラムを作成しておくことが必要である。

Ａ小学校においても、研究１年目にスタートカリキュラムとアプローチカリキュラム作成を行い、研究２年目の４月に実践をしていった。更に、実践の結果を踏まえ、カリキュラム改善をして３年目の研究発表となった。（今回の実践は２年目、４月の実践記録）

スタートカリキュラムの作成を低学年の担任に任せるのでなく、全学を挙げて取り組むことによって、全教師の意識が変わってくる。Ａ小学校のスタートカリキュラムの実施には、１年の担任だけでなく、専科教諭など、他の教員も指導にかかわっている。

スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムの研究を幼稚園や保育所と一体となって行ったことにより、教師の変容があった。１年１組の男性教諭は、小学校に幼稚園や保育所の手法を取り入れた授業を取り入れていた。「ゲーム」「手遊び」等の遊びの要素を取り入れた授業を行うなど、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの連続性を意識した授業を実践していた。

6　まとめ

スタートカリキュラムについて積極的に取り組んでいる教育委員会や学校が増えてきている。しかし、スタートカリキュラムに関心のない校長や教員もまだ多い。

スタートカリキュラムの有効性をどのようにしたら説得力のある研究とすることができるかを考えて研究に取り組んだ。スタートカリキュラムの有効性について、少しは新たな手法を提言できたのではないかと考える。

スタートカリキュラムを実施していくのはそう簡単なことではない。しかし、各地の教育委員会、先進的な小学校でその取り組みは始まっている。本研究が、少しでもスタートカリキュラムの発展・充実の参考となることを願っている。

《参考文献・資料》

１）東京都教育庁調査「小一問題・中一ギャップの実態調査について」
2011年　東京都教育庁

２）東京都教育庁「就学前教育プログラム及び就学前カリキュラム実証研究事業」
2012年　東京都教育庁

３）文部科学省「小学校学習指導要領解説・生活編」　2008年　日本文教出版

４）四谷第三小学校・幼稚園研究紀要「幼児期から児童期への子どもの発達と学びの充実と滑らかな接続」
2006年　新宿区立四谷第三小学校

５）梅木小学校「育ちと学びの連続性・就学前教育と小学校教育の互恵性のある連携と円滑な接続」
2011年　梅木小学校

６）和田信行著「幼小の滑らかな接続についての実証的な研究」　2007年　日本生活科・総合的学習教育学会誌14号研究論文

７）和田信行著「わくわくドキドキカリキュラム」　2008年　学陽書房

８）和田信行編著「生活科新たなるステージへ」　2010年　日本文教出版

９）和田信行他監修「しっかり育つしながわっ子」　2010年　品川区役所

10）日保協研究紀要「保小の連携実践事例集・まとめと展望」　2010年　日本保育協会